

---

# 思い込みの果てに

八十四歳まで生きる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

思い込みの果てに

### 【Nコード】

N0009E

### 【作者名】

八十四歳まで生きる

### 【あらすじ】

鶴を助けたお爺さんの家に、若く美しい女がやってくる。女は、部屋を覗くなというが・・・

(前書き)

鶴の恩返しの世界感をブチ壊されてはたまらない。と思う人は避難してください。すみません

むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがすんでいました。

お爺さんは、見渡すかぎり白い雪の積もる林のなかを進んでいた。そこで、獲物は何とは言わないが、狩りをしているわけだ。毎日、林の中で狩りをしていると、時々不思議な光景を目にするこ  
とがある。

今回に限っては、鶴だ。

鶴が何者かが仕掛けたのであろう、罠にかかっていた。

鶴は足と羽根を痛めており、身動きが取れなくなってしまっていた。それを哀れに思ったお爺さんは、鶴の手当てを根気よく、数日の間  
行ったのである。

いつしか鶴は回復し、元気よく空へと飛び立って行った。

それからほんの数日がたったある日の夜、お爺さんとお婆さんの家  
に、鶴子と名乗る、それは美しい女が訪ねてきた。

女は、なにも言わずに織物をさせてくれ、といったそうだ。

お爺さんとお婆さんは、こんな雪の降る寒い季節に、若い女を一人  
追いつ返すのも可哀相だと、女の頼みを承諾した。

女はこうもいう。

織物をしているときの姿を見られるのは恥ずかしい。  
だから、終わるまで部屋の中は覗かないでほしい。  
それなら別に構わないが、と老夫婦。

日が昇り、目を覚ましたお爺さんは、カタンコットンカタンコ

ツトン……、という音を聞いていた。

鶴子は夜通し織物をしていたのだろうか？

そんななか、お婆さんは少しだけ不気味に感じていた。

そんなお婆さんの不安を感じ取ったのか、お爺さんがこんなことを言い出した。

もしかしたら先日の鶴の恩返しかもしれない。

名前も鶴子と鶴がつく。手当てのお礼にと織物をくれるのかもしれないよ。

もちろんお爺さんは冗談のつもりだった。

そうかもしれないわね。とお婆さんも言う。

とにかく朝飯だと、鶴子をしようじを開けずに呼んでみた。

はい。と細く透き通る、美しい声が聞こえた。

朝飯の最中、お爺さんは鶴子に、何故私の家で織物をしているのか聞いてみた。

お爺さんは、今になってそんなことが気になった。

鶴子は恥ずかしそうに、裾を口元にあてながら、言った。

それは言えません。

一言残して、鶴子はまた部屋へと入っていった。

お爺さんとお婆さんは、しばらく鶴子の部屋のしようじを見ていた。どちらともなく声をかけ、二人顔を見合わせ、何故言えぬのかと話した。

理由はあるだろう。言えないのだから。

二人は様々な憶測を互いに言い合った。鶴子に聞こえぬ程度の声で。

だんなに家を追い出されてもしたのか、それとも借金でもあり逃げ出してきたのか、そもそも家族はいるのだろうか。いくつかの可能性、だがやはり、二人は鶴の恩返しなのではないかと、どこかで思っていた。

馬鹿な話ではあるが、可能性がないわけではなかった。

お爺さんは、狩りに出掛けた。お爺さんが戻ってくるまでお婆さんは、あの不気味な女と一つ屋根の下二人きり。不安でないはずがない。

お人好しのお爺さんは大丈夫というが、お婆さんは違う。むしろ鶴の恩返しのほうが怖いのである。

何故か、化け物だからだ。

鶴とはいえ、人に化けるいじょうは例外なく化け物である。

それならばむしろ、罪人流人のほうがマシであった。何故なら人間だからだ。

お婆さんは気が気でなくなり、鶴子の部屋の前に立っていた。織物をするカタンコットンという音だけが響く。

その音はなにかを迫っているようであり、思い止まらせようとするものでもある。

お婆さんはただじっと、しよっじを見つめる。開ける気など、まったくもってない。

そして数分、お婆さんにとってはもっと長い、経った頃にふと、カタンコットン、音がやんだ。

お婆さんはハツとした。その瞬間、しよっじを少し滑らせ、

お婆さん、どうかされましたか。

鶴子が言う。

鶴子はしよっじの隙間から、お婆さんを見るのである。鶴子の顔の半分が覗く。綺麗な顔をしている鶴子だが、お婆さんは不気味で仕

方がなかった。

なんでもない、とお婆さんは言い、洗濯に向かった。

この日の晩である。

お爺さんが狩りから帰ると、カッタンコットン、音が聞こえてくる。鶴子が不気味でしようがない。

晩飯の後、鶴子が部屋に戻ったのを見計らい、お婆さんはお爺さんにきりだした。

お爺さんは平気だと言うが、お婆さんはダメなものはダメなのだ。

お婆さんは寝付けなかった。お爺さんはただの冗談だと言っていた。人に化けるのは狐か狸ぐらいなもの、鶴は人になんか化けはしない。そうはいうものの、嫌な汗がとまらなかった。

冷えているのに。

未だ、カッタンコットンと聞こえている。

そのときだ、鳥の鳴き声のような、甲高い音が聞こえた。

お婆さんは驚きのあまり、一瞬だけ呼吸ができなかった。

お婆さんはお爺さんを起こすと、今の聞いた音のことを話したが、聞き間違いと言うだけで取り合おうとしない。

そのときだ、また同じような音が聞こえた。

お爺さんは目を丸くし、お婆さんの方をみた。

二人はそーっと、音をたてないように、廊下をすすみ、鶴子の部屋の前まで来た。

カッタンコットン、まだ音は続いている。

鶴子が甲高い音を出したわけではなからう、鶴が人に化けることはない、そう思っただけでも、気になるのが人間だ。

お爺さんはしよじを少し開け、中を覗いてみた。

すると目が合った。

鶴子とお爺さんは、ちようど鉢合わせた。

驚きのあまり後ろへひっくり返るお爺さん。

お婆さんは声も出せないようだ。

そんな二人を見ていた鶴子が言った。

見ないと約束をしたのに、なぜ見たのですか。

今までとは違い、低く唸るような声だった。

そのことにも驚いた二人は、床に頭をつけながら謝った。

それを見た鶴子は続けた。

なら、詫びに少しばかり銭を。

これはえらいことになったとお爺さん。お婆さんに銭を持って来させ、そのすべてを鶴子に手渡した。

しばらくして、恐る恐る頭をあげた。

だが、そこにはもう鶴子の姿はなかった。

この話を聞いたとき、なにを馬鹿な、と思った。青年は言う。

まず第一に、鶴は恩返しなどしない。

ましてや銭を要求するなど・・・馬鹿馬鹿しいにも程がある。

恩を仇で返したようなものではないか。

それに、女は自分を鶴の化身だとは一言も言っていない。爺婆の思い過ぎいだ。

そう考えると、この話は一番大事に思える部分が抜けている。

何故織物をしている所を鶴子は見せなかったのだ。

見せたくない理由はなんだったのだ。



青年の話はもつともである。隣にいる女がいう。

知りたいのですか、あなた様は。

ああ、知りたいね。と青年は言う。

女はクスと笑うと、いいですよ。と部屋へ行き、戻って来た。

あなた様はこんなものがみたいのですか。

ん、どんなものだ。

酒がまわってきたであろう青年の頬は赤い。

あの爺婆は幸せだったのですよ。なにも知らず、ただ騙されただけのお人好し。

でも聞こえては居たんですよ。鶴がどうのこうのと。

だから利用しただけのこと。確かに私はなにもそれらしいことを言っただけではありませんが。

女は続ける。

鶴子は自分の荷物を見せたくなかったのですよ。なにも、着のみ着のまま雪山をさまよっていたわけではありませんからね。

ならなぜ、話のときにそう言わんのだ。

申し訳ありません。私もなにぶん口下手なもので。

かまわんさ。いいから、その見られたくない荷物とは、一体なんだ。

そう、青年が言うと、女は青年の背中にピタリとくっついてきた。青年も年頃である、少し口元が緩む。

だが、次の一瞬、青年の頬に冷たいものが当てられた。包丁である。

あなた様がみたいのなら仕方ありません。

これは既に何十という人間の血を吸っているのです。ごさいます。人の好奇心というものは、本当に難儀なものでございます。

(後書き)

書き上げてから、いろいろと修正してたらつじつまがあわなくなつた。最後の最後まで違和感が残り、納得できない感じ。まだまだ力が足りません。鶴子の事をもう少し書いたらよかったのかな、と。とりあえずこの話の基本である、人の色んな欲が、時には災いになるってことが伝われば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0009e/>

---

思い込みの果てに

2010年11月16日04時11分発行